



平成 27 年 西雲寺だより 秋号（43 号）

報恩講のご案内

10 月 17 日(土)～19 日(月)

17 日 お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

18 日 お日中(10:00～) 大逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

19 日 満日中 (9:30～)

法話 福井 奥田順誓 師

——18 日はバスが出ますのでご利用下さい——

放送会館前発(8:50)～東別院前～工大温泉前～西安居經由
坪谷発(9:00)

常森発(9:00)～国見～鮎川～小丹生經由

本山 御正忌報恩講 参拝旅行のご案内

裏面（4 ページ）をご覧ください。

初めての方も経験者もどなたでも是非♪

報恩講のこころ

知恩ということ

宗祖親鸞聖人は、一二六二年（弘長二年）十一月二十八日、本願念仏の仏道に捧げられた九十年のご生涯を終えられてお浄土に還られました。

聖人のご一生は、ご臨終にあつて「ついに念仏の息、たえましましおわりぬ」と記されており、すように、お念仏とともに生きられた九十年のご生涯でありました。私たちは聖人の祥月命日を、単に祥月命日といわずに、報恩講と名づけて、聖人の果たされたお仕事の尊さを讃え、そのご恩に報いる心をこめて大切に勤めさせていただくのです。

数年前、ある先生が「近年、ご恩ということ聞かなくなつた。そうすると、世の中が浅く冷たく感じられるようになった」とご指摘下さいました。ご恩とか、おかげさまということがわからなくなると、物事を大事にいただくということができなくなり、人間関係や絆も冷たく感じられるということでしょうか。逆に、ご恩を感じることができると、いのちの大切さや尊さを深くいただくことができ、人間関係やつながりに暖かさを感じることができるといふことだと思われまふ。それは人間にとって、



ご恩がわかるということ、ご恩をいただくということが、いかに大切かということ。恩ということ。「恩」の字から少し考えてみますと、心の上に因という字がのつています。因果の道理から申しますと、結果には必ず因があります。例えば食卓にいつもおいしいご馳走が並んでいるとします。ご馳走は果です。必ず因があります。今日は出来上がりを買ってきて並べるといふことがあるかも知れませんが、以前は母親が台所に立つて愛情

込めて作って下さつたものです。食事はそういう因があつて食卓に並んでいふのです。その「因」を心を感じ取つて感動している心を「恩」といふ字はあらわしているのです。私たちが食事の時に「いただきます」といふのはご馳走となつて下さつた「いのち」をいただくと共にそのご馳走にこめられた愛情をいただくのです。私たちは只今受けている結果だけをみて因にふれていませんので、そこに感動もご恩を感じることもないのです。不足や不満があるだけです。

大学の先生にお聞きした話ですが、今日は学生の親からの送金は銀行の口座に振り込まれますが、以前は現金書留だったのです。学生寮に入っている学生の毎月の親からの送金

は、大学の学生課に送られてきて、学生は呼び出しを受けて受け取りに行くのですが、その学生の顔を見ているときままだそうです。今晩は一杯飲めるぞという顔をする者、パチンコでも行こうかという顔をする者、しかしなかには涙を流して封筒を押して頂く学生もいるということ。その学生は現金書留に込められた因、すなわち親が貧しいなかから工面して送ってくれたその親の心に触れているから、涙を流しその封筒を頂くのです。今日は遊べるぞと思つていふ学生は送られてきた現金だけを見て親のこころに触れていないのです。

如来因位のご苦勞をいただく

私たちがお念仏申すことも同じです。お念仏申しても南無阿彌陀仏というお念仏にまであつて下さつた如来さまのお心、願心に触れないから、感動やよろこびが感じられないのです。如来さまは生死流転する私たちを救わんがため、ご本願をたて、そのご本願は南無阿彌陀仏となつて、我が名を称えてくれ、必ず救わんという呼び声となつて、私たちにはたらいでいて下さるのです。お念仏申すという心とは、常にご本願に立ち帰り、如来の願心をお願いしていくということです。『歎異抄』に、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつこころのおこるとき、すなわち摂取不捨の利益にあずけしめたもうなり

とあります。「念仏もうさんとおもいたつこ

ろのおこるとき」とは弥陀因位のおすがたである法蔵菩薩の発願と願心、そしてその願心を名号として成就するための兆載永劫の修行のご苦勞に、初めて頭が下がり手が合わさったときを指しています。阿弥陀の因位のご苦勞にふれていくところに、一念一念深い感動とともにお念仏が出て下さるのです。それが私のいのちとなって一生を歩ましめるのです。

遠く宿縁を慶べ

ああ、弘誓(ぐぜい)の強縁、多生にも値(も)うあいがたく、真実の淨信、億劫にも獲がたし、たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。(教行信証)

親鸞聖人の有名なお言葉です。聖人が浄土真宗のみ教えを顕かにする『教行信証』を執筆するに当り、如来の本願のおこころを聞法求道してきた人生を顧みて、はからずもわが身に獲ることのできるはずのない信心が発起したよろこびを感動をもって述べておられるのです。弘誓の強縁とは如来の本願、それは迷いの凡夫である私たちに、教えとなり、南無阿弥陀仏の名号となつてはたらいっているのです。しかし迷いを重ねてきた私たちには、生まれ変わり、死に変わりしても、本願に出遇い、信心を獲ることなど不可能だといわれるのです。しかししたまたまお念仏のおいわれに領き、信心を獲ることができたならば、遠く宿縁を慶べといわれるのです。たまたまというと偶然のようですが、その内面には遇うべくして遇うことができたという意味がありま

す。今日まで歩んできた過去は苦悩の人生であつたけれども、決して無駄ではなかつた。親鸞聖人においては、比叡山における二十年間の修行や学問は無駄ではなかつた、過去のすべてが本願に出遇うべく歩んできた人生であつたと深く領かれたのです。

遇いがたく信じかたし

私たちが如来のご本願に出遇うことは不可能だといわれるのはなぜでしょうか。それは私たちが仏さまに求めているものと、如来さまが私に与えようとされるものが全く異なるからです。私たちは常に状況の変化を求めています。病気ならば健康を、商売がうまくいかなければ、景気がよくなり商売が繁盛しますようにとか、家庭が円満にいきますようにとか自分の都合を仏さまにお願いしているのです。観音さまは私たちのどのような願いでもかなえて下さるといわれます。しかし如来さまは私の都合のよいように状況を変えて下さるわけではありません。私たちは自分自身でしっかりと生きていくように思っています。如来さまの眼から見れば、自分自身はつきりしていないのです。現在に対しては不平や不満をいただき過去に対しては、ああすればよかった、こうすればよかったと後悔や恨みをいただき、未来に対しては不安や虚しさを感じているのです。このような有り方を無明(むみょう)といえます。明るさがないのです。このような智慧のない私たちに本願に目覚めしめ、清浄なる信心を与えようとされるのです。本願に出遇えば私の一生は本願を聞き、本願に出遇うための一生であつたと只今の自分をいただくことができるのです。そして暗

かつた過去は本願に出遇うための尊い宿業因縁であつたと領くことができるのです。未来に対しては浄土を願う往生の道を一步一步、歩ませていただくのです。具体的には一生聞法させていただき、聞法が人生の歩みとなるのです。

宿業と運命

私たちは今までの過去の経験の積み重ねによつて今日の自分があるのです。それは生まれてからの経験ではなく曠劫以来迷いを重ねてきた経験の積み重ねです。このような過去の経験を宿業因縁というのです。今の自分を作ってきた背景です。宿業というのは自分自身になつたという責任感といわれます。いくら過去を恨んで責任を外にもつていっても、事実は自分が自分になつたのです。だから外に怨みをもつていくことはできません。宿業は常に運命と混同されますが、運命は自分の過去を他の責任にするものです。凡夫の妄念に立つ限り私たちの過去は運命です。しかし聞法求道を通し、如来の本願に出遇い、真実信心を獲たとき、不平不満でしかなかった現在のいのちが転ぜられて、かたじけない尊い命であつたと領けるのです。苦しみの原因でしかなかった過去が、本願に出遇うための宿業因縁であつたと拝めてくるのです。

このように本願に出遇い、信心を獲たときに広大な如来のご恩、そして私を今日まで育てていただいた善知識や先輩たちのご恩が知らされるのです。ご恩がいただければいよいよ身を慎しみ如来のご用にたつ生活をさせていただくかなければなりません。(住職)

本山 御正忌報恩講 参拝旅行のご案内

日 時 平成 27 年 11 月 27 日（金）日帰り

日 程 早朝、各地を巡回（国見→殿下→西安居→市街地→福井 IC）

午前は、佛光寺本廟（納骨所）に参拝
昼食は、佛光寺本山の白書院にて
午後は、佛光寺本山 御正忌報恩講 参拝
夕方、本山発、夜に福井着（各地を巡回）



費 用 旅費 6000 円・参拝懇志 4000 円（当日で結構です）

帰敬式 27 日正午におかみそりが行われます（2 万円）

交 通 大型バス 1 台

申込み 西雲寺まで連絡下さい（0776-97-2138）

締切り 10 月 31 日（定員約 40 名ですのでお早めをお願いします）

持ち物 お数珠、輪げさ、お経本（イスはあります）

※ご不明な点は遠慮なく西雲寺までお尋ね下さい

※私（一哉）は当日本山に残り、通夜布教（夜通し法話）に参拝し、翌日午前中に福井に戻ります。ご一緒下さる方はお申し出下さい。

心よりお待ちしております。

※お申し込みいただきましたら、詳しい日程などをお知らせいたします。

楽しくお参りいたしましょう！

お申し込み、お待ちしております！



発 行

真宗仏光寺派 専念山 さい うん じ 西 雲 寺

住職 護城一寿

筆頭総代 吉川芳弘

編集責任者 護城一哉

〒910-3523 福井市武周町 5 - 2

電話 0776-97-2138

メール kmgojo@mx3.fctv.ne.jp

ホームページ <http://arukou.net/>

次世代の方、分家された方に！

お寺から郵送いたします。どうぞ
ご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！

原稿や作品はもちろん、ご意見、
ご感想など、どしどしお寄せ下さい。
郵送でもメールでも構いません。お
待ちしております。